

<資料>

余半単体複体 $\mathcal{R}X$ について

A Property of the Cosimplicial Complex $\mathcal{R}X$

又賀 喜治*

Yoshiharu Mataga

半単体複体 X と, 単位要素をもつ可換環 R から導出される余半単体複体 $\mathcal{R}X$ には, 余面作用素と余退化作用素の合成と組み合わせにより, ある内部写像が構成される。内部写像が応用のための所期の性質を持つことを確認する。応用については, 何段階かあるうちの第一段階を述べる。

キーワード: 半単体複体, 余半単体複体, 半単体複体の R 導出, 対構成,

第1節 目的

参考文献 1) P.28 に定義されている対構成と呼ばれる写像 (本資料では第4節 (4.1))

$$c : \text{hom}(X, \mathcal{R}Y) \times \text{hom}(W, \mathcal{R}X) \longrightarrow \text{hom}(W, \mathcal{R}Y)$$

が余半単体複体としての写像であることを示し, c は推移的性質 (第4節 (4.2))

$$c(c(f, g), h) = c(f, c(g, h))$$

を持つことを確かめる。1) にはこれらの事実は明記されているが, その証明の詳細は記されていない。これらの命題は, 余半単体複体 $\mathcal{R}X$ に備わっているある性質の応用として導かれる。その性質を第3節補助定理 3-2 および 補助定理 3-3 に述べ, それら補助定理の証明を資料とする。

以下の第2節では余半単体複体 $\mathcal{R}X$ を定義し, 第3節では $\mathcal{R}X$ に備わる性質を証明とともに述べ, 第4節では, その性質に基づいて定義される上記の対構成について記す。

第2節 余半単体複体 $\mathcal{R}X$

本節では, 参考文献 1) の Chapter 1 および Chapter 10 を参照し余半単体複体 $\mathcal{R}X$ を定義する。半単体複体の基本的性質については参考文献 2) を参照した。

半単体複体の圏を \mathcal{S} とする。余半単体複体 \mathcal{X} は次の (i), (ii) から成る ^{1)Chapter10}。

- (i) 各整数 $n \geq 0$ に対して, $\mathcal{X}^n \in \mathcal{S}$ (n を余次元という),
- (ii) 各整数の対 (i, n) ($0 \leq i \leq n$) に対して, 余面作用素と呼ばれる写像 $d^i : \mathcal{X}^{n-1} \rightarrow \mathcal{X}^n \in \mathcal{S}$ と余退化作用素と呼ばれる写像 $s^i : \mathcal{X}^{n+1} \rightarrow \mathcal{X}^n \in \mathcal{S}$ が備わっており, 余面作用素と余退化作用素は次に記す等式群をみたす。

* 流通科学大学商学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

(2010年4月9日受理)

$$\begin{aligned}
 d^j d^i &= d^i d^{j-1} & (i < j) & & s^j d^i &= d^i s^{j-1} & (i < j) \\
 s^j s^i &= s^i s^{j+1} & (i \leq j) & & s^j d^i &= id & (\text{恒等写像}) & (i = j, j+1) \\
 & & & & s^j d^i &= d^{i-1} s^j & (i > j+1)
 \end{aligned}$$

2つの余半単体複体 \mathcal{X}, \mathcal{Y} に対して, 余写像 $f: \mathcal{X} \rightarrow \mathcal{Y}$ は, 余面作用素, 余退化作用素と可換な写像 $f: \mathcal{X}^n \rightarrow \mathcal{Y}^n \in \mathcal{S} (n \geq 0)$ から成る写像群を指す。余半単体複体を対象とし, 余写像を射とする圏を $c\mathcal{S}$ と表す。

$\mathcal{X}, \mathcal{Y} \in c\mathcal{S}$ とするとき, それらの積 $\mathcal{X} \times \mathcal{Y} \in c\mathcal{S}$ は次のように定義される: 余次元 n の半単体複体は $\mathcal{X}^n \times \mathcal{Y}^n \in \mathcal{S}$ とし, 余面作用素と余退化作用素は, \mathcal{X}, \mathcal{Y} それぞれに備わっている余面作用素, 余退化作用素の積とする。 $X \in \mathcal{S}, \mathcal{Y} \in c\mathcal{S}$ とするとき, $X \times \mathcal{Y} \in c\mathcal{S}$ は, $X \times \mathcal{Y}^n$ を余次元 n の半単体複体とし, $id \times d^i, id \times s^i$ を余面作用素, 余退化作用素とする余半単体複体とする。

$\mathcal{X} \in c\mathcal{S}$ とする。 $\mathcal{X}^{-1} \in \mathcal{S}$ と $d^0: \mathcal{X}^{-1} \rightarrow \mathcal{X}^0 \in \mathcal{S}$ が備わっており,

$$d^0 d^0 = d^1 d^0: \mathcal{X}^{-1} \rightarrow \mathcal{X}^1 \in \mathcal{S}$$

が成り立つとき, \mathcal{X} は添加されている, あるいは添加余半単体複体といわれる。このとき, $d^0: \mathcal{X}^{-1} \rightarrow \mathcal{X}^0$ は添加写像と呼ばれる。

$\Delta[n] (n \geq 0)$ を n 次元標準半単体複体とする。余次元 n の半単体複体として $\Delta[n]$ をもち, 余面作用素, 余退化作用素をそれぞれ $d^i = \delta_i, s^j = \sigma_j$ とする余半単体複体を Δ と表し, 標準余半単体複体という。ここで, $\delta_i: \Delta[n] \rightarrow \Delta[n+1] (0 \leq i \leq n+1), \sigma_j: \Delta[n] \rightarrow \Delta[n-1] (0 \leq j \leq n-1)$ は, 参考文献 2) の P.4 で同じ記号のもとで解説されている写像である。また, 整数 $s \geq 0$ を固定するとき, $\Delta^{[s]}$ は, 余次元 n の半単体複体として $\Delta[n]$ の s 骨格 $\Delta[n]_s$ をもつ余半単体複体とする。

R を単位要素をもつ可換環とする。 $X \in \mathcal{S}$ に対して, X の単体を基底とする R 上の自由加群を $R \otimes X$ と表すことにする。 $(R \otimes X)_n = R \otimes X_n$ を n 単体の集合とし, X に備わっている面作用素と退化作用素を標準的な方法で $R \otimes X$ に拡張するとき, $R \otimes X$ は R 加群の構造をもつ半単体複体となる。そして, $R \otimes X_n$ の部分集合 $(RX)_n$ を (2.1) により定義する ^{1)Ch1,2,1}。

$$(2.1) \quad (RX)_n = \{ \sum_i r_i \otimes x_i \mid \sum_i r_i = 1, r_i \in R, x_i \in X_n \}$$

各整数 n について $(RX)_n$ を n 単体の集合とし, $(R \otimes X)_n$ に備わっている面作用素, 退化作用素を $(RX)_n$ に制限するとき, $\{(RX)_n\}_{n=0,1,2,\dots}$ は半単体複体となる。これを RX と表す。このとき, R は半単体複体の圏からそれ自身への関手となる。 $R^0 X = X, R^1 X = RX$ とし, $n > 1$ に対しては, $R^n X$ を帰納的に $R^n X = R(R^{n-1} X)$ により定義する。

写像

$$\phi: X \rightarrow R \otimes X \in \mathcal{S}, \quad \psi: R \otimes (R \otimes X) \rightarrow R \otimes X \in \mathcal{S}$$

をそれぞれ

$$(2.2) \quad \phi(x) = 1 \otimes x, \quad \psi(r \otimes (\sum_i r_i \otimes x_i)) = \sum_i r r_i \otimes x_i$$

により定義する。このとき、(2.2) の ϕ, ψ は自然変換

$$(2.3) \quad \phi: Id \longrightarrow R, \quad \psi: R^2 \longrightarrow R$$

を誘導する。

余半単体複体 $\underline{R}X$ は次のように定義される ^{1)Chapter1, §4}。余次元 n の半単体複体は $(\underline{R}X)^n = R^{n+1}X$ とする。余面作用素, 余退化作用素は, (2.3) の自然変換を用いてそれぞれ,

$$d^i: (\underline{R}X)^{n-1} = R^n X \xrightarrow{R^i \phi R^{n-i}} R^{n+1} X = (\underline{R}X)^n$$

$$s^i: (\underline{R}X)^{n+1} = R^{n+2} X \xrightarrow{R^i \psi R^{n-i}} R^{n+1} X = (\underline{R}X)^n$$

と定義する。このとき、 $\underline{R}X$ は $d^0 = \phi: X \rightarrow R X = (\underline{R}X)^0$ により添加された余半単体複体となる。

第 3 節 $\underline{R}X$ に備わっている性質について

$X \in S$ とする。 $k \geq 3, 1 \leq i \leq k-2$ に対して写像 $\vartheta_i: (\underline{R}X)^{k-1} \rightarrow (\underline{R}X)^{k-1}$ を

$$\vartheta_i = d^{i+1} s^i + d^i s^i - id: (\underline{R}X)^{k-1} = R^k X \longrightarrow R^k X = (\underline{R}X)^{k-1}$$

により定義する ^{1)P.28}。このとき、簡単な計算により次の補助定理 3-1 の (3.1) から (3.8) までの等式が成り立つことが確かめられる。

補助定理 3-1 (3.1) $\vartheta_i \vartheta_i = id$

(3.2) $s^i \vartheta^i = s^i$

(3.3) $\vartheta_j \vartheta_i = \vartheta_i \vartheta_j \quad (|j-i| > 1)$

(3.4) $R^j \vartheta_i = \vartheta_{i+j}$

(3.5) $\vartheta_i \vartheta_{i+1} \vartheta_i \vartheta_{i+1} = \vartheta_{i+1} \vartheta_i$

(3.6) $\vartheta_{i+1} \vartheta_i \vartheta_{i+1} \vartheta_i = \vartheta_i \vartheta_{i+1}$

$$(3.7) \quad \vartheta_i s^j = \begin{cases} s^j \vartheta_{i+1} & (0 \leq j < i) \\ s^{i+1} \vartheta_i \vartheta_{i+1} & (j = i) \\ s^i \vartheta_{i+1} \vartheta_i & (j = i + 1) \\ s^j \vartheta_i & (j > i + 1) \end{cases} \quad (3.8) \quad \vartheta_i d^j = \begin{cases} d^j \vartheta_{i-1} & (0 \leq j < i) \\ d^{i+1} & (j = i) \\ d^i & (j = i + 1) \\ d^j \vartheta_i & (j > i + 1) \end{cases}$$

$n \geq 1$ とする。写像

$$w_n: (\underline{R}X)^{2n-1} = R^{2n} X \longrightarrow R^n X = (\underline{R}X)^{n-1} \in S$$

を、 $w_1 = s^0$ とし、 $n \geq 2$ に対しては、 w_n は次の写像の列の合成として定義する ^{1)P.28}。

$$R^{2n} X \xrightarrow{\vartheta_{n-1}} \dots \xrightarrow{\vartheta_1} R^{2n} X \xrightarrow{s^0} R^{2n-1} X \xrightarrow{R w_{n-1}} R^n X$$

補助定理 3-2 $n \geq 1$ とする。 $0 \leq i \leq n$ に対して図式 (3.9) は可換である。また、 $0 \leq j \leq n-1$ に対して図式 (3.10) は可換である。

$$(3.9) \quad \begin{array}{ccc} R^{2(n+1)} X & \xrightarrow{w_{n+1}} & R^{n+1} X \\ d^{i+(n+1)} d^i \uparrow & & d^i \uparrow \\ R^{2n} X & \xrightarrow{w_n} & R^n X \end{array} \quad (3.10) \quad \begin{array}{ccc} R^{2(n+1)} X & \xrightarrow{w_{n+1}} & R^{n+1} X \\ s^j s^{j+(n+1)} \downarrow & & s^j \downarrow \\ R^{2n} X & \xrightarrow{w_n} & R^n X \end{array}$$

証明 $w_2 = (Rw_1)s^0\vartheta_1 = s^1s^0(d^2s^1 + d^1s^1 - id) = s^0s^1 + s^1s^2 - s^0s^2$ であるので、次の3つの図式が可換であることは、計算により容易に示すことができる。すなわち、 $n = 1$ のとき図式 (3.9), (3.10) は可換である。

$$\begin{array}{ccccc} R^4X & \xrightarrow{w_2} & R^2X & & R^4X & \xrightarrow{w_2} & R^2X & & R^4X & \xrightarrow{w_2} & R^2X \\ d^2d^0 \uparrow & & d^0 \uparrow & & d^3d^1 \uparrow & & d^1 \uparrow & & s^0s^2 \downarrow & & s^0 \downarrow \\ R^2X & \xrightarrow{w_1} & RX & & R^2X & \xrightarrow{w_1} & RX & & R^2X & \xrightarrow{w_1} & RX \end{array}$$

図式 (3.9) は、 $n \geq 2$, $i = 0$ のとき、次に示すように、それぞれが可換である図式に分解することができる。ただし、図式中 $\xrightarrow{=}$ は恒等写像を表すとする。各図式の可換性は補助定理 3-1 による。

$$\begin{array}{ccc} R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_n} & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_{n-1}} & \dots \\ d^{n+1}d^0 \uparrow & & d^n d^0 \uparrow & & \text{(図式は次の行に続く)} \\ R^{2n}X & \xrightarrow{=} & R^{2n}X & \xrightarrow{=} & \dots \\ & & \xrightarrow{\vartheta_1} & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{s^0} & R^{2n+1}X & \xrightarrow{Rw_n} & R^{n+1}X \\ & & d^1d^0 \uparrow & & d^0 \uparrow & & d^0 \uparrow \\ & & \xrightarrow{=} & R^{2n}X & \xrightarrow{=} & R^{2n}X & \xrightarrow{w_n} & R^nX \end{array}$$

したがって、(3.9) は $n \geq 2$, $i = 0$ のとき可換である。 $n \geq 2$, $1 \leq i \leq n$ のときは、図式 (3.9) を、次のようにそれぞれが可換である図式に分解することができる。ただし、(*) の部分の可換性は n に関する帰納法による。

$$\begin{array}{ccccccc} R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_n} & R^{2(n+1)}X & \longrightarrow & \dots & \xrightarrow{\vartheta_{i+1}} & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_i} & R^{2(n+1)}X \\ d^{(n+1)+i}d^i \uparrow & & d^{(n+1)+i}d^i \uparrow & & & d^{(n+1)+i}d^i \uparrow & & d^{(n+1)+i}d^{i+1} \uparrow & \\ R^{2n}X & \xrightarrow{\vartheta_{n-1}} & R^{2n}X & \longrightarrow & \dots & \xrightarrow{\vartheta_i} & R^{2n}X & \xrightarrow{=} & R^{2n}X \\ & & \xrightarrow{\vartheta_{i-1}} & \dots & \xrightarrow{\vartheta_1} & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{s^0} & R^{2n+1}X & \xrightarrow{Rw_n} & R^{n+1}X \\ \text{(図式は上の行から続く)} & & & & & d^{(n+1)+i}d^{i+1} \uparrow & & d^{n+i}d^i \uparrow & (*) & d^i \uparrow \\ & & \xrightarrow{\vartheta_{i-1}} & \dots & \xrightarrow{\vartheta_1} & R^{2n}X & \xrightarrow{s^0} & R^{2n-1}X & \xrightarrow{Rw_{n-1}} & R^nX \end{array}$$

したがって、 $n \geq 2$, $1 \leq i \leq n$ のときも図式 (3.9) は可換である。

次に図式 (3.10) が可換であることを示す。 $n \geq 2$ とする。

$$\begin{aligned} Rw_n &= R\{(Rw_{n-1})s^0\vartheta_1 \cdots \vartheta_{n-1}\} = (R^2w_{n-1})(Rs^0)(R\vartheta_1) \cdots (R\vartheta_{n-1}) \\ &= (R^2w_{n-1})s^1\vartheta_2 \cdots \vartheta_n \end{aligned}$$

であるから、

$$\begin{aligned} w_{n+1} &= (Rw_n)s^0\vartheta_1 \cdots \vartheta_n = \{(R^2w_{n-1})s^1\vartheta_2 \cdots \vartheta_n\}s^0\vartheta_1 \cdots \vartheta_n \\ &= (R^2w_{n-1})s^1s^0\vartheta_3 \cdots \vartheta_{n+1}\vartheta_1 \cdots \vartheta_n = (R^2w_{n-1})s^0s^2\vartheta_1(\vartheta_3\vartheta_2) \cdots (\vartheta_{n+1}\vartheta_n) \end{aligned}$$

となり、図式 (3.10) は次のようにそれぞれが可換である図式に分解することができる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_{n+1}\vartheta_n} & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_n\vartheta_{n-1}} & \dots & \xrightarrow{\vartheta_{i+1}\vartheta_i} & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_i\vartheta_{i-1}} \\
 s^0s^{n+1}\downarrow & & s^0s^n\downarrow & & & & s^0s^i\downarrow & \text{(図式は次の行に続く)} \\
 R^{2n}X & \xrightarrow{\vartheta_{n-1}} & R^{2n}X & \xrightarrow{\vartheta_{n-2}} & \dots & \xrightarrow{\vartheta_{i-1}} & R^{2n}X & \xrightarrow{\vartheta_{i-2}} \\
 & & & & & & & \\
 \dots & \xrightarrow{\vartheta_3\vartheta_2} & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_1} & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{s^0s^2} & R^{2n}X & \xrightarrow{R^2w_{n-1}} & R^{n+1}X \\
 & & s^0s^2\downarrow & & & & s^0\downarrow & & s^0\downarrow \\
 \dots & \xrightarrow{\vartheta_1} & R^{2n}X & \xrightarrow{=} & R^{2n}X & \xrightarrow{s^0} & R^{2n-1}X & \xrightarrow{Rw_{n-1}} & R^nX
 \end{array}$$

したがって、 $n \geq 2, j = 0$ のとき図式 (3.10) は可換である。 $n \geq 2, 1 \leq j \leq n-1$ のときは、図式 (3.9) は、次のようにそれぞれが可換である図式に分解することができる。ただし、(**) の部分の可換性は n に関する帰納法による。したがって、この場合も図式 (3.10) は可換である。

$$\begin{array}{ccccccc}
 R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_n} & R^{2(n+1)}X & \longrightarrow & \dots & & \\
 s^j s^{j+(n+1)}\downarrow & & s^j s^{j+(n+1)}\downarrow & & & & \text{(図式は次の行に続く)} \\
 R^{2n}X & \xrightarrow{\vartheta_{n-1}} & R^{2n}X & \longrightarrow & \dots & & \\
 & & & & & & \\
 \longrightarrow & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_{j+1}} & R^{2(n+1)}X & \longrightarrow & \dots & \\
 & s^j s^{j+(n+1)}\downarrow & & s^j s^{j+(n+1)}\vartheta_j\downarrow & & & \text{(図式は次の行に続く)} \\
 \longrightarrow & R^{2n}X & \xrightarrow{\vartheta_j} & R^{2n}X & \longrightarrow & \dots & \\
 & & & & & & \\
 \xrightarrow{\vartheta_2} & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{\vartheta_1} & R^{2(n+1)}X & \xrightarrow{s^0} & R^{2n+1}X & \xrightarrow{Rw_n} & R^{n+1}X \\
 & s^j s^{j+(n+1)}\vartheta_1\downarrow & & & & s^j s^{j+n}\downarrow & & \text{(**)} \quad s^j\downarrow \\
 \xrightarrow{\vartheta_1} & R^{2n}X & \xrightarrow{=} & R^{2n}X & \xrightarrow{s^0} & R^{2n-1}X & \xrightarrow{Rw_{n-1}} & R^nX
 \end{array}$$

以上により図式 (3.9), (3.10) の可換性が示された。 証明おわり

補助定理 3-3 $n \geq 1$ のとき $w_n(R^n w_n) = w_n(w_n R^n) : R^{3n}X \rightarrow R^nX$ が成り立つ。

すなわち、任意の $X \in S$ について図式 (3.11) は可換である。

$$(3.11) \quad \begin{array}{ccc}
 R^{3n}X & \xrightarrow{R^n w_n} & R^{2n}X \\
 w_n R^n \downarrow & & w_n \downarrow \\
 R^{2n}X & \xrightarrow{w_n} & R^nX
 \end{array}$$

証明 $w_1 = s^0$ であるから、 $n = 1$ のとき補助定理 3-3 が成り立つことは明らかである。

$w_2 = s^0 s^2 \vartheta_1, w_3 = s^0 s^2 s^4 \vartheta_3 \vartheta_1 \vartheta_2$ であることは容易にわかる。 $n \geq 2, 1 \leq k \leq n-1$ に対して、 k 個の写像 $\vartheta_{2n-(2k+1)}, \vartheta_{2n-2k}, \dots, \vartheta_{2n-(k+2)}$ の合成を (3.12) の通り Θ_k^n とおく。

$$(3.12) \quad \Theta_k^n = \vartheta_{2n-(2k+1)} \vartheta_{2n-2k} \cdots \vartheta_{2n-(k+2)}$$

このとき, n に関する帰納法により, $n > 3$ に対して w_n は

$$(3.13) \quad w_n = s^0 s^2 \dots s^{2(n-1)} \Theta_1^n \Theta_2^n \dots \Theta_{n-1}^n \quad (n > 3)$$

と表せることがわかる。したがって, 図式 (3.11) で問題とする写像は

$$(3.14) \quad w_n(\mathbf{R}^n w_n) = s^0 s^2 \dots s^{2(n-1)} \Theta_1^n \Theta_2^n \dots \Theta_{n-1}^n \quad (\text{作用素の合成として次の行に続く}) \\ s^n s^{2+n} \dots s^{2(n-1)+n} (\mathbf{R}^n \Theta_1^n) (\mathbf{R}^n \Theta_2^n) \dots (\mathbf{R}^n \Theta_{n-1}^n)$$

$$(3.15) \quad w_n(w_n \mathbf{R}^n) = s^0 s^2 \dots s^{2(n-1)} \Theta_1^n \Theta_2^n \dots \Theta_{n-1}^n \quad (\text{作用素の合成として次の行に続く}) \\ s^0 s^2 \dots s^{2(n-1)} \Theta_1^n \Theta_2^n \dots \Theta_{n-1}^n$$

と表される。(3.4) 式と (3.7) 式を利用することにより, 式 (3.14), (3.15) は次の形に書き表されることがわかる。

$$(3.16) \quad w_n(\mathbf{R}^n w_n) = s^{j_1} \dots s^{j_{2n}} \vartheta_{k_1} \dots \vartheta_{k_\ell} \\ (0 \leq j_a \leq 3n-2, 0 \leq k_b \leq 3n-2 \quad (a = 1, \dots, 2n, b = 1, \dots, \ell))$$

$$(3.17) \quad w_n(w_n \mathbf{R}^n) = s^{j'_1} \dots s^{j'_{2n}} \vartheta_{k'_1} \dots \vartheta_{k'_{\ell'}} \\ (0 \leq j'_a \leq 3n-2, 0 \leq k'_b \leq 3n-2 \quad (a = 1, \dots, 2n, b = 1, \dots, \ell'))$$

(3.14) と (3.15) が写像として等しいことを示すために, $\mathbf{R}^n X$ よりも扱いの簡単な対象を利用する。無限個の異なる文字 g_0, g_1, \dots から生成される自由群 ${}^3)\S 1.10$ を G とし, G の要素の無限列から成る集合を Ξ とおく。

$$\Xi = \{(\xi_0, \xi_1, \dots) \mid \xi_i \in G \quad (i = 0, 1, \dots)\}$$

Ξ に対して下記の (3.18), (3.19) により定義される 2 種類の作用素 ζ^j, t_i ($j = 0, 1, 2, \dots, i = 1, 2, \dots$) を考える。 ζ^j は, 座標番号が $j-1$ 以下の要素を保ち, 第 j 座標の要素に第 $j+1$ 座標の要素を右から掛け, 座標番号が $j+2$ 以上の位置にある要素を番号が 1 だけ小さい座標の位置に移す作用素である。 t_i は第 i 座標の要素と第 $i+1$ 座標の要素を入れ替え, 他の座標の要素は保つ作用素である。

$$(3.18) \quad \zeta^j(\dots, \xi_{j-1}, \xi_j, \xi_{j+1}, \xi_{j+2}, \dots) = (\dots, \xi_{j-1}, \xi_j \xi_{j+1}, \xi_{j+2}, \dots)$$

$$(3.19) \quad t_i(\dots, \xi_{i-1}, \xi_i, \xi_{i+1}, \xi_{i+2}, \dots) = (\dots, \xi_{i-1}, \xi_{i+1}, \xi_i, \xi_{i+2}, \dots)$$

\mathbf{R}^k ($k \geq 1$) は, 作用素 ζ^j, t_i の Ξ への作用において座標を k だけ増加させた作用に置き換える働きをもつとする。すなわち,

$$(3.20) \quad \mathbf{R}^k \zeta^i = \zeta^{i+k} \quad (3.21) \quad \mathbf{R}^k t_i = t_{i+k}$$

ζ^j, t_i は次に列挙する (3.22) から (3.28) までの性質を持つことは容易にわかる。

$$(3.22) \quad \zeta^j \zeta^i = \zeta^i \zeta^{j+1} \quad (i \leq j) \quad (3.23) \quad t_i t_i = id \quad (3.24) \quad \zeta^i t^i = s^i$$

$$(3.25) \quad t_j t_i = t_i t_j \quad (|j-i| > 1) \quad (3.26) \quad t_i t_{i+1} t_i t_{i+1} = t_{i+1} t_i$$

$$(3.27) \quad t_{i+1} t_i t_{i+1} t_i = t_i t_{i+1} \quad (3.28) \quad t_i \zeta^j = \begin{cases} \zeta^j t_{i+1} & (0 \leq j < i) \\ \zeta^{i+1} t_i t_{i+1} & (j = i) \\ \zeta^i t_{i+1} t_i & (j = i+1) \\ \zeta^j t_i & (j > i+1) \end{cases}$$

等式 (3.22) は第2節 (ii) の等式 $s^j s^i = s^i s^{j+1}$ ($i \leq j$) に対応し, 等式 (3.23), (3.24), (3.25), (3.21), (3.26), (3.27), (3.28) はこの順序で等式 (3.1), (3.2), (3.3), (3.4), (3.5), (3.6), (3.7) に対応する。

定義式 (3.12) に対応して t_j の合成による作用素 T_k^n ($n \geq 2, 1 \leq k \leq n-1$) を次のように定義する。

$$(3.29) \quad T_k^n = t_{2n-(2k+1)} t_{2n-2k} \cdots t_{2n-(k+2)} \quad (k \text{ 個の作用素 } t_j \text{ の合成})$$

また, (3.14) と (3.15) にそれぞれ対応して, Ξ への次の2つの作用素 A と B を考える。

$$(3.30) \quad A = \zeta^0 \zeta^2 \cdots \zeta^{2(n-1)} T_1^n T_2^n \cdots T_{n-1}^n \quad (\text{作用素の合成として次の行に続く})$$

$$\zeta^n \zeta^{2+n} \cdots \zeta^{2(n-1)+n} (R^n T_1^n) (R^n T_2^n) \cdots (R^n T_{n-1}^n)$$

$$(3.31) \quad B = \zeta^0 \zeta^2 \cdots \zeta^{2(n-1)} T_1^n T_2^n \cdots T_{n-1}^n \quad (\text{作用素の合成として次の行に続く})$$

$$\zeta^0 \zeta^2 \cdots \zeta^{2(n-1)} T_1^n T_2^n \cdots T_{n-1}^n$$

(3.30) と (3.31) は, (3.14) と (3.15) をそれぞれ (3.16) と (3.17) の形に変形したのと同じ理由により, それぞれ (3.32) と (3.33) に変形できる。

$$(3.32) \quad A = \zeta^{j_1} \cdots \zeta^{j_{2n}} t_{k_1} \cdots t_{k_\ell}$$

$$(0 \leq j_a \leq 3n-2, 0 \leq k_b \leq 3n-2 \quad (a = 1, \dots, 2n, b = 1, \dots, \ell))$$

$$(3.33) \quad B = \zeta^{j'_1} \cdots \zeta^{j'_{2n}} t_{k'_1} \cdots t_{k'_\ell}$$

$$(0 \leq j'_a \leq 3n-2, 0 \leq k'_b \leq 3n-2 \quad (a = 1, \dots, 2n, b = 1, \dots, \ell'))$$

(3.30) および (3.31) の形のままで実際に A と B を Ξ の任意の要素に作用させると, それらの結果は同一であることが確かめられる。すなわち,

$$A(\xi_0, \xi_1, \xi_2, \dots) = (\xi_0 \xi_n \xi_{2n}, \xi_1 \xi_{n+1} \xi_{2n+1}, \dots, \xi_{n-1} \xi_{2n-1} \xi_{3n-1}, \dots)$$

$$B(\xi_0, \xi_1, \xi_2, \dots) = (\xi_0 \xi_n \xi_{2n}, \xi_1 \xi_{n+1} \xi_{2n+1}, \dots, \xi_{n-1} \xi_{2n-1} \xi_{3n-1}, \dots)$$

このことから (3.32), (3.33) 式の形に表されている A と B は, 等式 (3.21) と (3.26) を用いることにより, それぞれ

$$A = \zeta^0 \zeta^1 \cdots \zeta^{3(i-1)} \zeta^{3(i-1)+1} \cdots \zeta^{3(n-1)} \zeta^{3(n-1)+1} E$$

$$B = \zeta^0 \zeta^1 \cdots \zeta^{3(i-1)} \zeta^{3(i-1)+1} \cdots \zeta^{3(n-1)} \zeta^{3(n-1)+1} F$$

と表すことができる。ここで, E, F は t_j ($1 \leq j \leq 3n-1$) いくつかの合成から成る Ξ への作用素とする。このように表すとき,

$$E(\xi_0, \xi_1, \xi_2, \dots) = (\xi_0, \xi_n, \xi_{2n}, \xi_1, \xi_{n+1}, \xi_{2n+1}, \dots, \xi_{n-1}, \xi_{2n-1}, \xi_{3n-1}, \dots)$$

$$F(\xi_0, \xi_1, \xi_2, \dots) = (\xi_0, \xi_n, \xi_{2n}, \xi_1, \xi_{n+1}, \xi_{2n+1}, \dots, \xi_{n-1}, \xi_{2n-1}, \xi_{3n-1}, \dots)$$

と, 作用の結果は同じでなければならない。したがって, E と F は (3.23), (3.25), (3.26), (3.27) を考慮すれば同一形に表される作用素であると結論できる。すなわち, A と B は作用素として等しい。

以上のことから, (3.14) の $w_n(R^n w_n)$ と (3.15) の $w_n(w_n R^n)$ についても, 補助定理 3-1

の関係式を利用すれば, s^j と ϑ_i を用いて全く同一の形に表すことができることになる。したがって, 補助定理 3-3 が成り立つ。 証明おわり

第 4 節 対構成

$X, Y \in \mathcal{S}$ に対して, $\text{hom}(X, Y)$ は \mathcal{S} における写像複体を表すとする。 $X \in \mathcal{S}, Y \in c\mathcal{S}$ に対して $\text{hom}(X, Y)$ は, $\text{hom}(X, Y^n)$ を余次元 n の半単体複体とする余半単体複体とし, $\text{hom}(X, Y)$ の余面作用素, 余退化作用素は, Y のそれらから標準的に導かれるものとする。ここでは, 記号の煩雑さを避けるために次に記すように, 2 種の関手を同じ記号 $\text{hom}(,)$ で表し, $\text{hom}(,)$ の括弧内に記入される 2 つの対象に注意することにより区別することにする。

$$\text{hom} : \mathcal{S}^\circ \times \mathcal{S} \longrightarrow \mathcal{S} \qquad \text{hom} : \mathcal{S}^\circ \times c\mathcal{S} \longrightarrow c\mathcal{S}$$

ここで, $\mathcal{S}^\circ, c\mathcal{S}^\circ$ はそれぞれ $\mathcal{S}, c\mathcal{S}$ の双対圏を表す。

$W, X, Y \in \mathcal{S}$ に対して, 対構成と呼ばれる余単体複体間の写像

$$(4.1) \quad c : \text{hom}(X, \underline{R}Y) \times \text{hom}(W, \underline{R}X) \longrightarrow \text{hom}(W, \underline{R}Y)$$

を, q 単体の対 $f : \Delta[q] \times X \rightarrow \underline{R}Y \in \text{hom}(X, \underline{R}Y)_q$ と $g : \Delta[q] \times W \rightarrow \underline{R}X \in \text{hom}(W, \underline{R}X)_q$ に対して, 余次元 $n-1$ ($n \geq 1$) において

$$\Delta[q] \times W \xrightarrow{\text{diagonal} \times \text{id}} \Delta[q] \times \Delta[q] \times W \xrightarrow{\text{id} \times g} \\ \Delta[q] \times \mathbf{R}^n X = \mathbf{R}^n(\Delta[q] \times X) \xrightarrow{\mathbf{R}^n f} \mathbf{R}^{2n} Y \xrightarrow{w_n} \mathbf{R}^n Y \in \text{hom}(W, \underline{R}Y)_q^{n-1}$$

を対応させる写像として定義する^{1)P.28}。このとき, 次の補題 4-1 が成り立つ。補題 4-1 の

(1) は補助定理 3-2 から導かれる。また, (2) は補助定理 3-3 から帰結される。

補題 4-1[1] P.28] (1) (4.1) で定義された写像 c は余半単体複体としての写像である。

(2) $f : \Delta[q] \times X \rightarrow \underline{R}Y \in \text{hom}(X, \underline{R}Y)_q, g : \Delta[q] \times W \rightarrow \underline{R}X \in \text{hom}(W, \underline{R}X)_q,$

$h : \Delta[q] \times Z \rightarrow \underline{R}W \in \text{hom}(Z, \underline{R}W)_q$ とするとき, 次の等式が成り立つ。

$$c(c(f, g), h) = c(f, c(g, h)) \in \text{hom}(Z, \underline{R}Y)_q$$

参考文献

- 1) A.K. Bousfield, D.M. Kan : "Homotopy Limits, Completions and Localizations", LNM 304, Springer-Verlag (1972)
- 2) J.P. May : "Simplicial Objects in Algebraic Topology", D.Van Nostrand Company, Inc.(1967)
- 3) 寺田至・原田耕一郎 : "群論", 岩波講座現代数学の基礎 14, 岩波書店 (1997)